様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４８６７

研究課題名（和文）特別活動で育むいじめ未然予防プログラムの開発研究－人間関係を再構築する学級活動－

研究課題名（英文）Development and research of bullying prevention programs nurtured by extracurricular activities-Class activities to rebuild human relationships-

研究代表者
松岡　敬興（MATSUOKA, Yoshiki）

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０５１０５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、児童が他者とのかかわりにおいて課題を抱える実態を踏まえ、相互理解と人間関係の改善をめざす。全ての児童が参画でき、活動の成果を共有し合えるプログラムを開発した。本取組は４人１組で行う。互いになかまの発想を推察しつつ、静かに制作活動を進める。完成後、成員同士でイメージを確認し合い、自らの推察と仲間の発想とのズレを話合い共有する。
　その結果、すべての児童が自己有用感に触れ、自尊感情を高めながら参画できた。また児童一人一人が振り返りの場面で発表でき、必要とされる自己理解がもたらされた。なかまと共に一つの作品を協働しながら制作する描画表現活動により、望ましい人間関係の構築に繋げられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　いじめ問題を未然に防ぐうえで、すべての児童生徒を対象に、自己理解・他者理解を深めるために、特別活動での学級活動の開発が有用である。本研究では、学級活動として「いじめ未然防止プログラム」（協働的描画表現活動）を開発し、その教育実践を通して教育効果を分析・検討した。
　その教育効果について、質的調査、量的調査の両面から分析・検討を行い、その有効性を確認できた。今後は指導者が、児童生徒の人間関係を見据えつつ、彼ら同士が「かかわり合える場」を適切に設けることが重要である。プログラムを効果的に活用するには、カリキュラムマネジメントの視点から、意図的・計画的に年間計画に位置づけ機能させることが求められる。

研究成果の概要（英文）：The school where the study was conducted was experiencing problems related to student interaction and relationships among students. Accordingly, a classroom practice was developed in which all students participated in a collaborative drawing activity and then shared their results.
The activity was conducted in groups of four. While making inferences about the ideas of other group members, each student quietly worked on a creative drawing activity. After completing the work, the group members exchanged opinions on the images their group had created and talked about differences between their inferences and the actual ideas of the group members.
The collaborative drawing activity helped students perceive themselves as useful and improved their self-esteem, and all students in the class could participate in the drawing activity. Each student was able to present his or her ideas during the reflection session, which also helped the students make important discoveries about themselves.

研究分野：特別活動・道徳教育・生徒指導

キーワード：特別活動　いじめ　ガイダンス　学級活動　人間関係　共感性　自己理解・他者理解　自尊感情

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

いじめの定義は、いじめによる生徒の自死事件が引き金となり、これまで 4 度に渡り変更された。そしていじめ防止法 2 条に合わせて、「児童等に関して、当該児童等が在籍する学校に在籍している当該児童生徒と一定の人間関係にある他の児童生徒等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象と児童等が心身に苦痛を感じているもの」と定義されている。

菱村(2016)は、その定義が、多様ないじめの実態に対応するために、その幅を広げてきたと述べている。そしてその分、認知基準として曖昧さが残ることを指摘している。そうであるがゆえに、当該者である加害者、被害者を巻き込んだ未然予防のための取組が重要になる。

当時、都道府県ごとに「いじめゼロ」を目標に掲げて、多様な啓発活動が展開された。文部科学省「平成 26 年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、いじめの件数（1,000 人あたり）が都道府県別に示され、京都府（85.4）と佐賀県（2.8）との開きは極めて大きかった。

学級担任によるこの対応については、事象が深刻化し表面化した後で始まる傾向が強く見られた。チームでかかわる手だてを講じても、かなりの時間と労力（教育相談、保護者対応、家庭訪問、職員会議）を費やしているにも拘わらず、教育効果に繋がらない状況にあった。

いじめの事象の早急な発見を大切にしながらも、いじめを引き起こさないように、予防の視点から自己理解・他者理解を育む取組を展開することに教育効果を求めた。加害者・被害者の当事者になる前に、互いに理解し合う取組として「いじめ未然予防プログラム」が効果的であると考えた。

２．研究の目的

いじめ問題の解決を図るうえで、被害者はもとより加害者への介入が不可欠である。またすべての児童生徒を対象に、自己理解、他者理解を深めるために、特別活動である学級活動による取組の開発が求められる。

そこで学級活動の場で実施可能な「いじめ未然予防プログラム」を開発し、その実践を通して教育効果について分析・検討を加える。またいじめ防止対策推進法附則第 2 条の見直し検討が進められる中で、本プログラムを、各学校のいじめ防止基本方針の実効性を高めるための支援プログラムとして取り組む。

児童どうしが互いに協働しながら取り組む制作活動を、ガイダンスプログラム（協働描画表現活動）として位置づけ、研究協力校において実践することで、その教育効果について分析・検討する。そして児童どうしがよりよい人間関係を再構築するうえで、ガイダンスプログラムの有効性を実証する。

３．研究の方法

本研究では、いじめ問題を未然に予防する汎用性の高いプログラムを開発し、学級活動の時間で実践し、その教育効果について分析・検討して改善を加えた。研究分担者及び研究協力者（現職教員）との共通理解を図り、小学生高学年を対象に授業実践を依頼し、筆者が授業をファシリテートし、研究分担者には第２指導者（T2）を、研究協力者（学級担任）には第３指導者（T3）の役割をそれぞれ依頼した。教育効果については、すべての生徒を対象に、主として『自尊感情測定尺度［4 段階］（東京都版）』及び自由記述を用いて分析・検討する。

以下、プログラムの流れの概要について説明する。

本取組では 45 分間の授業を２コマ連続で充てる。よりよい人間関係を構築するために、他者理解をもとに自己理解を促すガイダンスプログラムとして、大判画用紙に絵画を共同制作活動として取り組み完成させる。

⑴本時の取組について説明する。（3 分）
⑵研究分担者（大学教員・専門家）による描き方（デッサンの仕方、クレパスの活用、ほか）のレクチャー及び具体的な実践に取り組む。（15 分）
⑶共同制作活動について説明する。（2 分）
⑷④児童一人一人が実践に取り組む。（32 分）
・４人１組で大判画用紙に絵画を作成する。テーマは、指導者が提示する。
・はじめに８分間描いたのち、時計回りに座席を替えて作業を進める。同様の操作を３回繰り返し、絵画を仲間と協働しながら完成させる。作業中は、無言で取り組む。
⑸ふりかえり（リフレクション）に取り組む。（10 分）
・グループの仲間と完成作品について、各自がどのような思いのもとで描いたのかを確かめ合う。さらに異見に着目し、児童相互間でのコミュニケーションを深める。
⑹グループごとに、リフレクションの内容について、チーム全員で発表する。
（15 分：2.5 分×6 グループ）
⑺全体でのふりかえりに取り組む。（8 分）

⑻授業アンケートを実施する。（8 分）
なお、各配分時間について、おおむね 2 分程度の超過によるズレを見込んでいる。

４．研究成果

いじめ問題を未然に予防するうえで、望ましい人間関係の構築が必要である。学級の児童一人一人を繋ぐ方途の一つに、ものの方や考え方、個性の違いを互いに認め合える人権感覚の育成があげられる。そこでいじめの未然予防をめざし、児童が互いに自己理解、他者理解を深めるためのガイダンスプログラムを開発し、特別活動の学級活動の時間において教育実践に取り組んだ。

本プログラムの特長は、4 人 1 組のグループで制作活動（大判の画用紙に絵画を完成させる）に取り組み、一つの共同作品を完成させることにある。制作中は会話をせずに、仲間の思いや考えを斟酌しながら、作品に自らの表現内容を描き足していく。直前に担当していた児童の後を受けて、自ら新たに作品に描き加えるとき、前者の捉えと自らの思いとの一致点やズレが生じる。完成後のふりかえりの時間では、児童間の異見に着目しつつ意見交換を行い、他者の思いに寄り添い各々が思考を深める。本プログラムでは、ふりかえりの時間を、互いに違いを受け止めて認め合うことができる重要なプロセスとして位置づけた。

開発したガイダンスプログラムを用いて、研究協力校の小学生高学年を対象に、2 年次には A 県 B 市の公立小学校で、3 年次には A 県 C 市の小学校においてそれぞれ教育実践を行い実証研究に取り組んだ。特別活動の学級活動の複数時間（2 コマ）扱いにして、授業記録（映像録画、音声）を残し、児童一人一人を対象に、自尊感情に関わるアンケートを実施した。なお下図 1 は、共同制作における作業の様子である。

教育効果としては、量的調査としてアンケート結果の分析、質的調査としての自由記述や映像記録に残されたノンバーバル（発言、動き、表情、しぐさ）な情報について意味づけを行い、人間関係に新たなうねりを生みだした。また児童一人一人の自尊感情をゆさぶり、学級内で新たな関係性の再構築をもたらした。

図 1　共同制作のようす

ここで令和 2 年（2020 年）2 月に取り組んだ、A 県 C 市の公立小学校の第 6 学年（2 学級）における教育実践に係る分析結果について説明する。本取組を通して、児童一人一人が共同制作活動に自発的にかかわり、グループの仲間と協働しながら取り組む姿が見られた。また、すべて児童が、周りの仲間を意識しつつ、グループ毎に一つの作品を完成させるために、仲間を慮りながら進めようとする姿が認められた。活動内容の特性から、グループを構成する一人一人が大切な存在であることに気づき、児童一人一人の自己有用感が高まり、引いてはグループへの帰属意識を高めたものと捉えた。

一方、児童の心理的変容効果については、アンケートとして『自尊感情測定尺度［4 段階］（東京都版）』を、実践の前後で実施した。α 学級（n=24）、β 学級（n=21）の結果（実践前，実践後）の内、特徴的なものを以下の表 1 に示す。（下線は筆者が付す）

表 1　心理検査の結果

【α 学級】

・「今の自分に満足している」	（2.92，3.17）
・「人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる」	（2.83，3.00）
・「人のために力を尽くしたい」	（3.52，3.33）
・「誰にも負けないものがある」	（3.30，3.08）
・「誰の役にも立っていないと思う」	（2.42，2.17）

【β 学級】

・「今の自分に満足している」	（2.86，3.24）
・「自分の中には様々な可能性がある」	（2.67，2.90）
・「ダメな人間だと思うことがある」	（2.67，2.33）
・「ほかの人の気持ちになることができる」	（2.43，2.86）
・「自分の行動や判断を信じることができる」	（2.86，3.10）
・「自分という存在を大切に思える」	（3.05，3.38）
・「自分のことを必要としてくれる人がいる」	（2.84，3.05）
・「人と同じくらい価値のある人間である」	（2.90，3.14）

また、自由記述について特徴的なものを抽出したものが、以下の表 2 である。

表 2　主な自由記述

・「仲間はどう思っているかは、自分で考えることが大切だと思いました。何も話さず仲間の考えを考えるのが難しかったです。絵を見て仲間はどんな考えをもっているかが少し気づけました。」
・「発表の時にはっきりと言えたこと。班とのコミュニティ力が高まったこと。」
・「自分の考えていることと友達の考えが違って、一つのことをやるとなったらあまりかみ合わなかったけど、最後はやりきったと思った。」
・「絵の続きを書く時に、違う人が書いているものに付け加えたら、その人の思っているのと違いました。人の思いを知ることが難しいことを知りました。これからは言葉で聞いて、確認したいです。」
・「班の人と何を描いたのかなどよく話し合えたことです。他にも、前へ出て発表するとき、上手く自分の考えを伝えることができたことです。」
・「絵を見ただけだと何を書いたのか分からなかったけど、説明を聞くと何を書いたのか分かるようになることに気づきました。説明が上手だと何か分からなくても伝わること。」
・「絵を書くことで協力することができると知りました。絵は個人の作品かと思っていたけど、4 人で 1 つの作品を作ると 4 人の作品という感じでいいなと思いました。」

よりよい人間関係の再構築をめざしたガイダンスプログラムによる教育効果は、学級の実態にもよるが、共通して「今の自分に満足している」の数値に上昇が見られた。共同制作活動の場面では、仲間の思いを推察しながら自分のイメージの表現に取り組み、ふりかえりを通してグループの仲間との作品に対する思いを確かめ合うことで、他者理解と自己理解がもたらされた。相互理解を深めるうえで、自分の思いを言語化することで、異見に出会いそれを確かめ合うことで、児童一人一人に新たな気づきが芽生えた。

また児童が認知した自己有用感は、集団活動により一つのことを成し遂げたとき、その構成メンバーの一人一人が理解するもので、必要とされていた自分への自覚と同意である。自己有用感は、他者が存在するからこそ、そのかかわりを通して認知がもたらされる。つまりプログラムの特長である共同制作活動は、その条件を充足している。児童に自己有用感がもたらされることで自己肯定感を呼び起こし、引いては自尊感情を高めることができた。表 1 の心理検査の結果に付した波線の内容は、彼らが本プログラムへの取組を通して、自己内対話を行い自ら下した判断によるものと考える。加えて本プログラムは協働しつつ行うことから、他者とのかかわりを通して気づき得る内容が、相手を信頼することで自己に自信をもたらすことが見てとれる。表 1 の心理検査の結果に付した二重線の内容は、このことを示していると捉える。

本研究課題を通して、ガイダンス機能を充実させることで、よりよい人間関係の再構築に繋がることが分かった。協働制作活動を例にあげると、ガイダンスプログラムの可能性が高まり、その教育効果を見据えた教育実践を意図的・計画的に進めることが、これからの生徒指導を機能させるうえで重要な役割を担うものと考える。本プログラムの機能が、児童にもたらした教育効果を分析した結果、すべての児童が自分事として自主的に参画し、集団で展開する取組として、他者理解及び自己理解を深められることを、指導者自身が理解を深めることが求められる。

感染症の影響下、最終年度においては、これまでに開発したガイダンスプログラム、その教育実践結果の分析・検討内容について、包括的に見直し改善プランの作成にも取り組んだ。いじめ問題を未然に予防するうえで、指導者は児童の人間関係に着目し、改めて彼らが互いに「かかわり合える場」の設定が重要である。そして今後、本研究成果を生かすうえで、プログラムの効果的な活用について、カリキュラムマネジメントの視点から考察し、意図的・計画的に年間計画に位置づけ、指導が自主的に取り組める実践にすることが肝要である。

「

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松岡敬興	４．巻 1
２．論文標題 ガイダンスプログラムによる望ましい人間関係の構築に関する研究 －共同制作活動を通した児童の心理的変容効果に着目して－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本生徒指導学会第21回大会（紙上開催）　自由研究発表集録	６．最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松岡敬興・蜂谷昌之	４．巻 69
２．論文標題 人間関係にみる協働的描画表現活動による児童への教育効果に関する一考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	６．最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松岡敬興	４．巻 49
２．論文標題 道徳の時間における「深い学び」についての一考察　－ロールプレイを用いた「アクティブラーニング型授業」に着目して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	６．最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松岡　敬興・蜂谷　昌之	４．巻 68
２．論文標題 道徳的視点からみた大正期児童作品に関する研究－博労小学校所蔵作文及び習字作品に着目して－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	６．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松岡　敬興	4．巻 67
2．論文標題 社会性を育む望ましい民主主義の教育に関する研究　－ドイツのベルリン州におけるNelson Mandela Schule校の取組に学ぶ－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6．最初と最後の頁 119-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松岡　敬興	4．巻 43
2．論文標題 教職大学院における現職教員学生と学部新卒学生とが共に学び合う授業の開発及び教育効果に関する研究	5．発行年 2017年
3．雑誌名 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 松岡敬興
2．発表標題 児童のグループによる描画表現活動を通した心理的変容効果に関する研究
3．学会等名 日本特別活動学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 松岡敬興
2．発表標題 ガイダンスプログラムによる望ましい人間関係の構築に関する研究 －共同制作活動を通した児童の心理的変容効果に着目して－
3．学会等名 日本生徒指導学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 松岡敬興
２．発表標題 人間関係にみる協働的描画表現活動による児童への教育効果に関する一考察
３．学会等名 日本生徒指導学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松岡敬興、蜂谷昌之
２．発表標題 Classroom Activities for Fostering Desirable Relationships Among students : A Group-based Collaborative Drawing Activity
３．学会等名 The 37th World Congress of the Int'l Society for Education Through Art（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松岡　敬興
２．発表標題 望ましい人間関係を育む学級活動の開発－「なかまといっしょにイメージをふくらまそう」の取組を通して－
３．学会等名 日本特別活動学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松岡　敬興
２．発表標題 望ましい人間関係を育むいじめの未然予防に関する研究（Ⅱ）　－小学校における実践活動結果の分析を通して－
３．学会等名 日本生徒指導学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 松岡　敬興，蜂谷　昌之
２．発表標題 Towards Building Better Relationships with Others through an Art Activity
３．学会等名 InSEA（International Society for Education through Art）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松岡　敬興
２．発表標題 新しい道徳授業をつくるために
３．学会等名 桃山学院大学教育セミナー，シンポジウム「特別の教科 道徳」の在り方を考える（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計9件

１．著者名 山本木の実、植田和也、金綱知征、松岡敬興、藤上真弓、毛利猛、清水顕人、笹屋孝允、岡静子、池西郁広	４．発行年 2020年
２．出版社 美巧社	５．総ページ数 163（pp.14-29,pp.138-143）
３．書名 子どもたちが育つ学級経営	

１．著者名 松下良平、徳本達夫、佐久間裕之、森佳子、林泰成、上原秀一、生澤繁樹、市川秀之、柳沼良太、梶原郁郎、松岡敬興、田中智志	４．発行年 2021年
２．出版社 一藝社	５．総ページ数 236（pp.163-176）
３．書名 道徳教育論 改訂版	

１．著者名 Yoshiki Matsuoka , Masayiki Hachiya	４．発行年 2020年
２．出版社 INTERNATIONAL SOCIETY FOR EDUCATION THROUGH ART	５．総ページ数 873（pp.484-489）
３．書名 "Classroom Activities for Fostering Desirable Relationships among Students: A Group-based Collaborative Drawing Activity". InSEA 2019 World Congress Proceedings	

１．著者名 Matsuoka,Yoshiki＆Hachiya,Masayuki	４．発行年 2020年
２．出版社 INTERNATIONAL SOCIETY FOR EDUCATION THROUGH ART	５．総ページ数 104（p.63）
３．書名 "Classroom activities for fostering desirable relationships among students: A group-based collaborative drawing activity". InSEA 2019 World Congress Abstracts	

１．著者名 松岡敬興	４．発行年 2019年
２．出版社 時事通信社	５．総ページ数 100（pp.44-51）
３．書名 小学校「特別の教科道徳」の授業プランと評価の文例	

１．著者名 編著者（和田孝・有村久春），著者（和田孝、木内隆生、松岡敬興、若林彰、中村豊、松田素行、有村久春、美谷島正義、京免徹雄、川﨑知己、藤平敦）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 208
３．書名 新しい時代の生徒指導・キャリア教育（第３章　子どもの変化とその理解，pp.35-52）	

1．著者名 編著者（伊藤潔志），著者（伊藤潔志、谷口照三、高橋公夫、奥田秀巳、嶋崎太一、澤田裕之、田中伸樹、滝澤佳奈枝、鈴木久米男、川口厚、辻野けんま、松岡敬興、吉田惠子、谷口雄一、木原一彰、中川雅道）	4．発行年 2019年
2．出版社 教育情報出版	5．総ページ数 207
3．書名 哲学する学校経営（第５章 5-3 コミュニティ・スクールの実際、第６章 6-4　学級経営と生徒指導）	

1．著者名 編著者（柴原弘志），著者（柴原弘志、柴田八重子、根岸久明、中野真悟、鈴木明雄、荊木聡、富岡栄、須貝牧子、田邊重任、松岡敬興、大舘昭彦、本屋敷耕三、両角太、石黒真愁子、松島千尋、及川仁美、菅明男、増田千晴）	4．発行年 2019年
2．出版社 明治図書出版	5．総ページ数 173（pp.56-59、pp.72-75、pp.88-91）
3．書名 板書＆指導案でよくわかる　中学校２年の道徳授業　35時間のすべて	

1．著者名 編者（伊藤潔志），著者（川本太郎，相馬伸一，松永幸子，松田智子，友野清文，杉山直子，渡部明，歌川光一，竹中烈，有馬知江美，田中直美，濱元伸彦，上村崇，奥田秀巳，北村陽，西脇雅彦，小泉博明，杉浦英樹，木原一彰，松岡敬興）	4．発行年 2017年
2．出版社 保育出版社	5．総ページ数 224
3．書名 哲学する教育原理　（第９章　現場と理論を結ぶ哲学　9-3 中等教育の現場と理論）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	蜂谷　昌之 (HACHIYA Masayuki) (60510542)	広島大学・教育学研究科・准教授 (15401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関